

## 巻 頭 言

精神文化学会 会長  
近藤 剛

イソップ寓話に興味深い話がある。

ヘラクレスが狭い道を歩いていると、地面に林檎のようなものが落ちていた。踏み潰そうとしたところ、そいつは二倍の大きさになったので、いっそう強く踏みつけ、棍棒で殴りつけた。そいつはますます膨らみ、道を塞ぐばかりになったので、ヘラクレスが棍棒を投げ捨て、呆気にとられて立ちつくしていると、アテナ女神が現れて言うには、「兄弟よ、止めるがよい。それは敵愾心であり争いであるのだ。相手にならず放っておけば元のままだが、揉み合うほどに、こんな風に膨れあがるのだ」

(中務哲郎訳 (1999年) 『イソップ寓話集』岩波文庫, 235-236 頁)

イソップ寓話は絵本の題材としても広く用いられているが、幼児向けの童話であると侮ってはならない。それは大人に対する教訓であり、古代人から現代人に対する警告ともなっている。この話の要諦は、こうである。

喧嘩や争いが大損害の因になることは誰の目にも明らかである、ということ。

(前掲書, 235 頁)

すなわち、争いが起こった場合、それを力でねじ伏せ、抑え込もうとしても逆効果にしかならない。力の行使は力の対抗を招き、感情をより煽り立て、争いをより激化させ、状況を泥沼化する。見かけ上いったんは収まったとしても、火種は燻り続ける。力の応酬は憎悪を増幅する。報復の連鎖は止まらなくなる。イソップ寓話はそのことを戒めている。

## 2 精神文化学研究[第7号]

「敵愾心」と「争い」と訳された単語について、ギリシャ語原文では *φιλονεικία* と *ἔρις* となっており、英語では *contentiousness* と *strife* と訳されている (cf., *Aesop's Fables: A new translation by Laura Gibbs*, Oxford University Press, 2002)。*ἔρις* という言葉から、我々は女神エリスを想起し、そこから「林檎のようなもの」がギリシャ神話に登場する「不和の林檎」(Apple of Discord) にちがいないと容易に連想することができる。

英雄ペレウスと海の女神テティスの結婚式が盛大に催された時、エリスだけが招待されなかった。エリスは不和と争いを司る女神であった。怒り心頭に発したエリスは、宴の席上に黄金の林檎を投げ入れた。「最も美しい女神に (*καλλίστη*)」という文字を添えて。最高の美貌を自負する三人の女神たち、ヘラ、アテナ、アフロディーテは、我こそが得るにふさわしいと一つの林檎をめぐる争いを始めることになる。周知のとおり、この裁定はパリスの審判に委ねられることになるのだが、期せずしてそのことが、あのトロイア戦争の勃発に発展していくことになるうとは、神々すらも予想していなかったかもしれない。

現下の世界にも「不和の林檎」が投げ入れられている。我々はヘラクレスのように、それを力で踏み潰し、棍棒で殴り続けている。不和はなくなるところか、ますます大きく増えていき、我々の行く手を妨げている。それは各地に広がっていき、誰も收拾することができず、ひたすらに混乱と惑乱を引き起こしている。この先に、我々の未来は何ら展望できないだろう。力ではなく、知恵による解決が求められている。

知恵による解決という点に、精神文化学会の存在理由を見出すことができる。知恵を求め、探り、深めることが肝要であり、それなくしては対話の共通基盤を見出すことができず、事態を沈静化させ相互理解のもとに解決策をもたらせることができず、未来を志向することができなくなる。単なる知識の蓄積、情報の処理とは異なる知恵の探求という姿勢は、性質的にデジタル思考ではなくアナログ思考であると思われる。不和を調停する知恵の創出が、我々の未来を拓く鍵となる。